



—ふるさとながと・こんにちわ—

わが家のオアシス

私にとって「長門」は、故郷というには程遠く、ましてそれを語るなんてもつてのほか、つい最近も次男の出産で実家に厄介になっていくくらいですから。高校卒業後、実家を出てまだ10年たっていませんが、その間学校に通い、就職・結婚をし、あつという間に2人の子供が誕生し、あ何と慌ただしい人生かと自分自身感心してしまいましたが、そんな私が最近、未熟ながらも親として思う事があります。田舎のあけっぴろげな空間で育った私と、この先都会のマンションで何不自由のない環境と共に育っていく子供達との間にギャップと不安を感じる事です。しかしそんな親子間に生

じるであろうズレを自然にたいてくれる架け橋となるのが、私の故郷「長門」だと思っております。子供達には青い海と潮の香りの中で釣りや泳ぎを楽しむ事や、自然とふれあう事を知ってほしいし、私の育った場所が同時に彼等の田舎でもある事を自慢に思っしてほしいのです。東京育ちの主人は仙崎が大好きで、誰よりも帰るのを楽しみにしています。今後も私達一家にとって素晴らしい田舎でありますように。



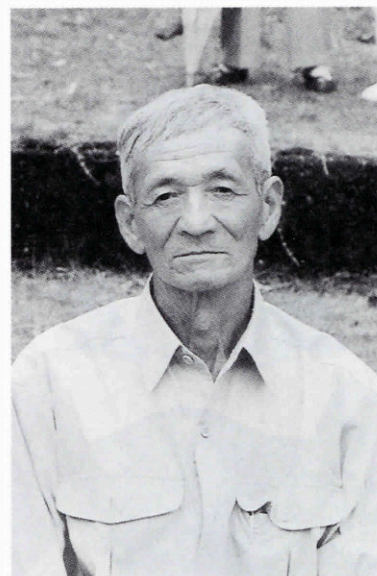
▲家族で海水浴

川崎知代さん

かわさきともよ／昭和47年生／江戸川区在住／旭町出身／旧姓江本／現在専業主婦

母親の言葉を胸に

—達者です—



村中正人さん

むらなかまさと／79歳／真木区

「戦後シベリアへ5年間抑留された時がなかった。母親に、小さい時から何事も辛抱して奉公しなくてはいけないと、よく言われていたので、苦しい時母の言葉を思い出し、なにくそ」と踏ん張れたので、生きて帰れたのでしょ」と村中さん。

現在、奥様、ご長男夫婦、お孫さんの計7人家族。田の仕事（農業）と木の伐採が主な仕事とのこと。

「近所の人が、年を取っているのに元気がいいのは、シベリアで5年間凍結（成長が停止）されたせいだと、よく冗談を言われます」と笑顔で語る。

今年春からは地区の老人クラブのお世話もされ「交通安全教

室を開いたり、旅行に行ったりして、楽しく過ごしています」と村中さん。
好きな食べ物は、芋類、豆類、牛乳とのことで、健康の秘訣は、「夜床について、毎日手足を動かす運動を欠かしたことはありません」と元気に話されました。



▲伐採作業中の村中さん